

愛知女短大 ○安藤文子

名古屋女大短大 石原久代

名古屋女子文化短大 白石孝子

目的 近年，国際化，情報化の進展，生活意識・価値観の多様化など，急速に変化する時代の要請に応え，多くの大学・短大において時代に適応しうる教育内容を目指し，学科の名称変更及びカリキュラムの再編成がすすめられている。

このような状況の中で，高校生が家政系大学・短大に対してどのようなイメージをもち，その内容に対しどの程度の認識を持っているかを把握することは，今後の方向を検討する上で意義あることと考え，調査を実施した。また，地域による差異を知るために，本調査は中部地域と関東地域について行った。

方法 調査時期：1990年9月

調査方法：集合調査法

調査対象：中部・関東地域の普通科及び家政科に在籍する高校3年生の男女生徒1652名

結果 1. 家政学科に対するイメージは，生活学科より明るい，やわらかい，あたたかいと評価され，逆に生活学科では新しさや知性的イメージが高く評価されていた。

2. 学習分野についての認識は，家政学科では，食物・被服分野が約80～90%，次いで家庭経営・保育が約50%で，他の分野への認識度は低いといえる。これに対し生活学科では住居・家庭経営・健康・環境（各60～70%）が多くあげられた。

3. 家政系大学・短大へ進学することによる長所としては「家庭内で役立つ知識・技術の習得」が最も多く，次いで「専門知識及び職業に結びつく技術の習得」であった。逆に短所としては，就職への不利益，学習内容への偏りをあげる者が多く，的確な認識がなされていない点が問題としてあげられた。